

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷四十五第

月三年七十和昭

論叢

資本主義的論理續論……………經濟學博士 柴田敬

ナチス社會保險の經營原理……………經濟學士 中川與之助

金本位の廢棄と支拂準備……………經濟學士 中谷實

錢莊業の機構……………經濟學士 徳永清行

時論

大東亞戰爭と經濟建設……………法學博士 神戸正雄

研究

日本綿業確立期に於ける貿易政策……………經濟學士 松井清

佛領印度支那貿易の性格……………經濟學士 河野健二

岩瀨忠震の開國交易思想……………經濟學士 松木順

說苑

李孤帆著「招商局三大案」……………經濟學士 鈴木總一郎

附錄

彙報・外國雜誌論題

佛領印度支那貿易の性格

河野健 二

一 印度支那貿易の特徴

印度支那聯邦が成立したのは一八八七年のことであるから、それ以前の征服時代を別とすれば、フランスの印度支那領有は現在に及ぶまでに約半世紀を經過したわけである。印度支那經濟は、この全期間を通じて特徴的な植民地的性格を附與されて來た。フランスの植民政策は、その高度の本國中心主義の故をもつて他國の植民政策と區別されてゐるが、印度支那貿易の内容を見ると、われ／＼はかゝるフランス植民政策の具體的な現れを明瞭に看取ることが出来る。

植民地貿易の一つの特色は、貿易數量および貿易價額の増大が當該植民地經濟の實質的な發展とは一應無關係に齎られるといふ點に求められる。植民地貿易の發展は終局的には植民地の實質的な發展を導くものであるとはいへ、それは本國にとつて決して望ましいことではなく、本國は一方では植民地の貿易を發展せしめつゝしかもその經濟向上をあらゆる手段を以つて阻止せんとするのであり、かくしてその貿易は植民地性といふ基本的な性格を擔ひつゝ營まれるわけである。従つて、植民地貿易の増大あるひは盛況から、直ちにその植民地經濟の發展あるひは向上を結論することは不可能である。それは單に植民地に於ける商品流通の増大と貨幣經濟の浸透を意味するに過ぎないからである。植民地貿易を見ると、このことは先づ考へて置かれねばならない。

印度支那の貿易は一九〇七年以後、恐慌後の二三の時期を除いて、連年相當額の輸出超過を記録してゐる。このことは印度支那貿易の一つの特徴的な性格であると言はれる。併し、それにも増して特徴的なことは連年の輸

出超過にも拘はらず印度支那の國際貸借が借方勘定を示してゐるといふ事である¹⁾。外債利子、企業利潤・運賃・保険料などの支拂が多額に上つてゐるからである。外見上の繁榮にも拘はらず、植民地貿易はこのやうな秘密を藏してゐる。印度支那の一人當りの輸出額が、一九三九年に於いてさへ一五二法約一五圓にしか當つてゐないことは此の間の消息を示すものである²⁾。又、輸出超過といつても、それは貿易統計に現はれた限りでの輸出超過であることは勿論であり、この點に關して基本的には貿易統計一般について、特殊的には印度支那の貿易統計についての吟味あるひは批判が豫め爲されねばならない。貿易統計に於いて示される輸出額、輸入額が果して現實の貿易を正確に反映したものであるかどうかは、一應問題であるが、印度支那の貿易統計に於いては輸出品に對する税關の評價額が著しく高く、その爲に印度支那の貿易統計の示す輸出超過は現實の超過額を越へることが多いと言はれる。更に又、石炭とかゴムの輸出對價は事實上はフランス本國の輸出會社の金庫に收められて、印度支那へ還送されないにも拘はらず、貿易統計がそれをも含めて輸出超過額を表示してゐる點を注意しなければならぬ³⁾。尙ほ、注意すべきこととして、例へば印度支那と本國との間に借款が成立するやうな場合には、之によつて印度支那の輸入は増加し出超過は減少するけれども、印度支那の實質的發展の側から見るときは、これによつて印度支那經濟はその發展の基礎地盤を與へられると言はねばならない。植民地の輸出超過は、従つて必ずしも當該植民地の繁榮を意味しないし、寧ろその反對であることすら稀でないと言ふことが出来るであらう³⁾。

註一 印度支那の全人口を二千三百萬として算出す。之に比べて最近の日本の人口當り輸出額は四十九圓、フィリッピンは四十六圓、蘭印は四十四圓、泰國は十七圓に相當する。

以上は印度支那貿易の輸出超過のみに就いて述べたに過ぎないが、植民地貿易の考察に當つては一般に右のやうな配慮を行ふことが必要である。一國の貿易はその國の經濟の基礎地盤の反映であると言はれるが、植民地の

1) 松岡教授。佛印國際貸借に關する一考察¹⁾本誌五四卷一號參照。
2) G. Khérian; "La Querelle de l'industrialisation de l'Indochine." 逸見重雄氏著。佛領印度支那研究¹⁾四〇〇頁參照。
3) 印度支那の輸出超過からその繁榮を結論する見解は印度支那におけるフラン

貿易は更にその上に本國の經濟政策によつて方向と内容とを與へられたものとして現はれる。印度支那貿易の場合に於いては、他國に比べて本國の經濟政策が極めて重要な役割を演じてをり、それによつて貿易の方向と内容は高度の本國中心主義によつて貫徹されてゐる。以下、貿易統計の示すところに隨つて、印度支那貿易の最近の狀況を窺ひそこに於ける植民地的性格を検討しよう。貿易の歴史的な發展過程の究明はこゝでは行はない。

二 印度支那の全貿易

印度支那の貿易總額^{註1}は、一八九九年—一九〇三年の五箇年平均額に就いて見れば約一億四千萬ピアストルであつたが、世界大戰前の五箇年平均に於いては約二億ピアストルとなり、一九二四年後の五箇年、すなはち印度支那が最も繁榮した時期^{註2}と言はれるこの期間の平均額は五億ピアストルに増大し、一九二七年には五億五千萬ピアストルと成つた。その後、一九三〇年以後は世界恐慌の蔓延とともに二億ピアストル以下に減じたが一九三五年を契機として再び恢復に向ひ、同年以後五箇年間の平均は約四億ピアストルと上昇し、一九三九年には五億八千萬ピアストルに著増した。

第一表 印度支那貿易五箇年平均表¹⁾ (單位=百萬ピアストル)

年	輸 入		輸 出		合 計
	年	額	年	額	
一八九九年—一九〇三年	一八九九年	七八	一九〇〇	六二	一四〇
一九〇九年—一九一三年	一九〇九年	九二	一九一〇	一〇五	一九七
一九二四年—一九二八年	一九二四年	二二三	一九二五	二八六	五一〇
一九三五年—一九三九年	一九三五年	一五五	一九三六	二九九	三九四

註一 フランスの貿易統計は一般貿易 (Commerce général) と特殊貿易 (Commerce spécial) とを區別してゐる。一般貿易は本來の貿易の他に、通過貿易および保税倉庫中の商品・積換・再輸出商品を含むものであり、特殊貿易は普通に言はれる貿易を示すものである。前掲數字はこの内の特殊貿易を示すものである。

ス人の米輸出業者によつて代表されてゐる Union Coloniale Française; "Les Problèmes posés par le Développement industriel de l'Indochine." p.91以下参照。

1) ロアカン著外務省譯「佛領印度支那經濟發展史」一六八頁所載表に Tableau du

註二 この期間内に日本の貿易額は二十倍してをり、その他例へば隣國のセイロン島の貿易額は十倍してをり、海峽植民地も五倍に増加してゐる點より見るならば、印度支那の貿易額の増加は決して多いと言ふことは出来ないし、絕對額に於いてもこれらの隣國よりは劣つてゐる。

印度支那貿易は總額に於いて以上のやうな増加を見せてゐるのみでなく、その貿易尻に於いても一九〇七年以降は出超に轉じ、一九二三年、一九二九年、一九三〇年、一九三一年を除くはかは連年出超をつゞけ、大戰末年たる一九一九年の如きは出超二億四千二百萬金フランに達してゐる。併し、貿易價額は以上のやうな増大を示したが、これには貨幣價値の變動が含まれてゐるから、正しい貿易の趨勢を知るためには、之を除去することが必要である。恐慌前よりの貿易數量と金フラン換算額とを示せば、次の如くである。

第二表 印度支那貿易の變遷²⁾
數 量 (千噸) 價 格 (一九一三年制百萬金フラン)

年	輸入	輸出	合計	輸入	輸出	差額	合計
一九二八年	五〇四	三、三三四	三、九三八	五〇〇	六〇〇	合	一、一〇〇
一九二九年	五九一	三、一八七	三、八七八	五〇〇	五五〇	—	一、〇〇〇
一九三〇年	五三三	二、六三二	三、一六五	五〇〇	五七〇	—	七〇〇
一九三一年	四四四	二、四九九	三、〇四三	五〇〇	三三三	()	四六五
一九三二年	三三三	三、〇〇九	三、三四二	四二七	四〇七	一〇	四四四
一九三三年	三三三	三、三三三	三、五五五	四二七	四〇七	三	四九一
一九三四年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一
一九三五年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一
一九三六年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一
一九三七年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一
一九三八年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一
一九三九年	三三三	三、三三三	三、八〇〇	四二七	三三三	元	四〇一

* 一九三九年九月の金價値による。

貿易廻數に就いて見れば、一九二八年の三九七萬廻は一九三二年には三〇九萬廻に減少したが、これを最低として其後は回復に向ひ一九三四年には既に恐慌前の水準に達し、爾來漸増の傾向を示しつゝ一九三九年には五二八萬廻に達するに至つてゐる。これを輸出入の内譯に就いて見れば、輸出廻數は輸入廻數よりも遙かに多く、七倍から十倍以上であることが知られる。これは印度支那の輸出に於いて鐵産物輸出が多く、輸入に於いて織物類の多いことの結果である。更に、輸出の累年の變動が輸入の變動よりも著しいことも一つの特徴であり、恐慌の影響およびその恢復に於いて輸出廻數の變動が主動的な地位を占めてゐることが知られる。印度支那貿易の變動は輸出の變動を中心として行はれてゐると言ふことが出來よう。貿易價額の變動を貨幣價値の影響を除去して一九一三年制定の金フランに於いて見れば、興味ある結果が得られる。恐慌前に於いて一一億フランに達した貿易總額は其後漸減して一九三三年には三億九千萬フランとなり、恐慌からの恢復とともに増加に轉じたと言ふものゝ、一九二八年の水準に比較すれば、未だその半分にしか達してゐない状態である。貿易戻は一九三二年以來ふたゝび出超に轉じ、一九三五年には八千萬フランとなり恐慌前の状態に復歸し、その後は一億フランを超へるに至つたが、なほ第一次大戰後の二億四千萬フランのごときには及んでゐない。輸出入に於いては、廻數で見るとき輸出が輸入の十倍弱に當つてゐたが、價額に於いてはせいゝく一・五倍程にしか當つてゐない。このことは印度支那の輸出品が適當り價格に於いて輸入品よりも著しく劣つてゐることを示すものである。

註 大戰直前の一九一三年に於ける貿易は金フラン額にして次の如くであつた。總額五七七百萬法、輸出三〇八百萬法、輸入二六九百萬法、出超三九百萬法。戦後の一九一九年には總額十億法、出超二億四千萬法、翌一九二〇年には總額十三億五千萬法に達し金フラン額における最高を記録してゐる。

貿易數量の變化を廻數のみで示すことは必らずしも正確であるとは言へない。印度支那の輸出品中の石炭とゴ

ムとを例にとつて言ふならば、石炭輸出の増減は薙數の顯著な變化として現はれるが、ゴムの場合には之に比して少い。ところが適當りの體積は言ふまでも無く、石炭よりもゴムのほうが大であり、ゴム輸出の増減は従つて體積量を見るときに始めて顯著に現はれるからである。かくして貿易數量の變動を正確に知るためには、重量のほかに體積についても見る必要がある。一九二五年を基準とする體積・重量・金フラン價額の變動は、第三表のごとくである。³⁾

第三表 印度支那貿易の變遷 (一九二五年を基準とする指數)⁴⁾

年	薙數		體積		金法價	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
一九二八年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二九年	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三
一九三〇年	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三
一九三一年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三二年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三三年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三六年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三七年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三八年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

(1) 暫定數

一にしてゐる。上述したごと

く體積の指數に於いては、石炭の演ずる役割は薙の指數に於ける場合よりも著しく僅少であるが、之と反對に、

體積の指數は、薙の指數に比べて一九二八年から一九三一年までは下落の度が著しく、一九三二年以後は恢復の度が著しい。輸出體積は、薙數とは反對に、一九三七年に於いても増加を續けてゐる。とは言へ、暫定的結果の示すところによれば、一九三八年には減退を示してをり、この點に於いては他の指數と規を一にしてゐる。上述したごと

3) 基準年度たる一九二五年の貿易内容は次の如くであつた。輸出二五〇萬噸、輸入四一萬噸、金額にして輸出六億、輸入四億四千萬金フランであつた。
 4) T. Smolski; "L'année 1938 dans l'évolution économique de L'Indochine," Bulletin Économique de L'Indochine, 1939, Fascicule I, p. 22.

ゴムは體積の指數に於いて重要性を回復してゐる。金フランに換算した價額の指數は、經濟的不振の深刻さを遺憾なく示してをり、その恢復は極めて遅々たるものがある。一九三四年のみは上昇を示したがその程度も頗る制限されてゐて、一九三八年には再び新たな減退が認められる。輸入に於いては、重量と體積との並行關係は輸出に於けるよりも更に緊密である。一九二九年に始めて恐慌前の最高點に到達したが、その後の減退は、輸出よりも一層著しく、且つ永續的である。

印度支那貿易は、このやうに世界恐慌を機として一旦減退したが、その後一九三五年頃を境として再び恢復に向はんとする方向を示してゐる。貿易戻も恐慌後は再び出超に轉じて、印度支那貿易の顯著な特徴を示すに至つてゐるが、これを文字通りに受取り得ないことに就いては既に前述した。貿易價額の著しい増大は主としてフランの價値下落に由來するものであり、之を除去して考察するならば、未だ恐慌前の状態には遠く及ばない有様である。入手し得た最も新しい資料は一九四〇年七月までの貿易統計を載せてゐるが、それによつて最近三箇年の趨勢を見れば、次の如くである。

第四表 最近三箇年の貿易比較⁽⁵⁾

年	數 量 (千噸)			價 額 (百萬法)		
	輸入	輸出	合計	輸入	輸出	差額
一九三八年一月—七月	二七六	一、四四五	一、七三二	一、〇八〇	一、五五五	四七五
同 全 年	四九六	三、九四四	四、四四〇	一、九七七	二、八四四	八六七
一九三九年一月—七月	三五七	二、六七七	三、〇三四	一、四四三	一、六六二	四九九
同 全 年	五七七	四、六四三	五、二二〇	二、三三二	三、四四四	四九九
一九四〇年一月—七月	三〇六	二、八〇〇	三、一〇六	一、五五五	二、六五二	一、〇九七

言ふまでもなく、一九三七年は支那事變の勃發した年であり、その後二年遅れて一九三九年九月には第二次歐

洲戦争が開始され、翌一九四〇年六月には巴里が陥落し、獨佛停戦協定が成立した。他方、印度支那について見るならば、これより先一九四〇年六月には援蔣輸出を停止し、九月には皇軍の平和進駐を見たことは周知のごとくである。印度支那貿易はかうした諸情勢を反映して、一九三八年には前年に比べて減少を示し、翌一九三九年には僅かに増加したとは言ふものの、一九四〇年には再び停滞状態に入つてゐる。この間の消息は、貿易相手國を見るととき更に明瞭となる。以下それを試みよう。

三 印度支那貿易の相手國

第五表 印度支那貿易國別表 (比率)

年	入		出	
	フランス	同植民地 外國	フランス	同植民地 外國
一九二九年	四・二	三・四	三・〇	一・三
一九三〇年	五・〇	四・七	三・七	二・四
一九三一年	四九・五	三・五	四・〇	一・二
一九三二年	五・一	四・九	三・六	二・〇
一九三三年	五・一	三・七	三・七	二・〇
一九三四年	五・四	二・〇	四・五	二・八
一九三五年	五・四	二・八	四・三	四・一
一九三六年	五・五	二・九	三・三	四・三
一九三七年	五・五	三・五	四・一	六・二
一九三八年	五・二	四・一	四・一	五・九
一九三九年	五・一	四・一	四・四	四・八
一九四〇年(七月まで)	四七・一	三・七	三・二	四・八

印度支那貿易の相手國に於いて、主位を占めるものはフランス本國である。フランスは關稅障壁によつて印度支那を自國産業の獨占的な市場たらしめるとともに、印度支那の食料・原料資源を確保することを必要としたからである。一八九二年以來の同化關稅は、フランスから印度支那への輸出を無稅とし、外國からの輸出はこれを防遏せんと

1) Annuaire Statistique de L'Indochine. および Tableau du Commerce Extérieur de L'Indochine により算出。

したものであるが、かうした同化政策は其後も引續いて施行せられ、一九二八年のキルシエ關稅およびその後の恐慌は一層かゝる本國中心主義を強化したのである。

印度支那貿易に於いて、フランス本國の地位は輸出よりも輸入に於いて著しく、第一次大戰中の時期を除けば大體印度支那の輸入の五〇パーセントがフランスからの輸入によつて占められてゐる。一九三〇年後はこの本國依存度が一層高まつてゐることが認められるが、これは一九二九年から實施されたキルシエ關稅が印度支那の東洋諸國からの輸入を困難ならしめたこと、及び恐慌によつて本國中心主義が一層強化されるに至つたことを示すものである。一九四〇年に於ける下落は、フランス本國の敗戦によるものと見てよいであらう。印度支那の輸出に於いてはフランス本國の占める割合は約四分の一であつたが、一九三〇年の恐慌後はその相對的地位を著しく高めるに至り、一九三六年には五五パーセント、フランス植民地への輸出を加ふれば六一パーセントに達し、大戰前に比べて約二倍に増加した。ところが輸出貿易の絶對額に於いては一九三六年と大戰前とは大した差違がないから、フランス本國の割合の増加は諸外國への輸出を絶對的にも相對的にも減少せしめたこととなる。輸出に於いてフランスの占める地位は、一九三六年を頂點として低下の傾向を示し、一九三九年には三二パーセント一九四〇年には再び二五パーセントと成つたが、これは第二次歐洲戰爭の勃發、本國の敗戦等に負ふものであらう。最近三箇年の主要貿易相手先は次の如くである。

第六表 印度支那主要貿易先別 (單位百萬法)

輸 入 先	一九三八年	一九三九年	一九四〇年	輸 出 先	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
	%	(七月マデ)	%		%	%	(七月マデ)
本 國	10.5	11.5	11.5	本 國	15.5	15.5	15.5
フ ラ ン ス	10.5	11.5	11.5	フ ラ ン ス	15.5	15.5	15.5
イ タ リ ヤ	10.5	11.5	11.5	イ タ リ ヤ	15.5	15.5	15.5
米 國	10.5	11.5	11.5	米 國	15.5	15.5	15.5
日 本	10.5	11.5	11.5	日 本	15.5	15.5	15.5
英 國	10.5	11.5	11.5	英 國	15.5	15.5	15.5
オーストラリア	10.5	11.5	11.5	オーストラリア	15.5	15.5	15.5
南 洋 諸 島	10.5	11.5	11.5	南 洋 諸 島	15.5	15.5	15.5
他 國	10.5	11.5	11.5	他 國	15.5	15.5	15.5

佛領印度支那貿易の性格

第五十四卷 三三五 第三號 九七

2) Tableau du Commerce Extérieur de L'Indochine, 1938. Statistique Mensuelle du Commerce Extérieur de L'Indochine, 1939, 1940.

同植民地	七(四・一)	七(三・三)	五(三・七)	同植民地	一六(五・〇)	一七(〇・四)	一三(三・五)
東洋諸國	六九(三二・七)	七〇(一九・〇)	五三(三三・四)	東洋諸國	八〇(二・三)	一四三(五〇・七)	一六二(二二・七)
支那	一四(七・三)	一〇(四・四)	一六(四・八)	支那	七五(二・六)	一七〇(四・八)	一〇〇(一三・三)
香港	一三(七・三)	一六(六・九)	一五(九・六)	香港	二七(九・六)	三〇(八・八)	四三(五・五)
蘭印	八(四・三)	一〇(四・三)	六(五・三)	シンガポール	二七(九・七)	三三(〇・三)	三三(八・三)
シンガポール	五(二・九)	一〇(四・〇)	八(五・三)	日本	八七(三・〇)	一六(四・六)	五七(九・八)
日本	五(二・八)	四(一・六)	三(〇・〇)	蘭印	二六(〇・九)	三(一・〇)	一一(〇・四)
歐米諸國	三三(一三・〇)	三九(一〇・〇)	三三(一三・五)	歐米諸國	四八(五・〇)	七三(〇・六)	七八(六・七)
合衆國	九(四・九)	九(四・〇)	一五(九・六)	合衆國	二九(八・七)	四八(二・九)	一〇(八・四)
英國	一三(三・二)	一七(二・〇)	一四(一・五)	英國	九(二・〇)	三(三・七)	二(一・〇)

右表によつて明かなやうに、フランス及びスランス植民地に次いで重要なものは、東洋諸國との貿易である。

印度支那の輸入に於いて東洋諸國の占める地位は、キルシエ關稅設定前のノルマルな時期に於いては輸入の約半分四七・八%(一九二八年)を占めてゐたが、キルシエ關稅の實施によつて東洋諸國からの輸入が阻害されたため、一九三〇年には二八%にまで低落した。一九三〇年の恐慌の襲來とともに、かゝる不自然な關稅制度に對する改訂が行はれ、一九三二年には日本との特別協定、一九三五年には支那との通商協定が成立したけれども、現實にはこれらの協定も大した効果を齎らさなかつたことは、その後の數字が示してゐる通りである。東洋諸國のうちでは支那と香港の占める割合が最大であり、香港からの輸入を支那に加算すれば、全輸入の一五パーセントが支那から齎らされてゐるといふ事になる。蘭印、シンガポール、日本からの輸入が之に次いでゐるが、日本からの輸入がこのやうに極めて少ないことは、既に三十年來引續いてゐる傾向であるが、このことはフランスが如何に日本との競争を恐れてゐたかを物語るものである。歐米諸國の占める割合は比較的僅少であるが、第二次歐洲戰

3) 太平洋協會編「佛領印度支那」四〇一及び四〇七頁。

争の勃發とともに東洋諸國からの輸入は當然に増加を見たが、之と並んで合衆國からの輸入が一億フランを越へるに至つたことは注目すべき現象である。印度支那からの輸出に於いては、一九三八年までの東洋諸國向け輸出は三〇パーセント足らずであつて、餘り大きくはない。これはキルシエ關稅が東洋諸國に於いて報復的な措置を採らしめるに至り、日本、支那が印度支那からの輸入を防遏せんとしたことの結果である。キルシエ關稅實施前に於いて、東洋向け輸出が六七・八%を占めてゐたのに比べると、印度支那輸出の本國依存度が如何に増大したかを知ることが出来る。今次の歐洲戦争の勃發とともに本國向け輸出が激減し、これに代つて東洋諸國の占める地位が絶對的にも相對的にも増大してフランス本國を凌駕するに至つたことは注目すべき現象であり、印度支那輸出はこれによつて本來の姿に立歸つたものと言ふことが出来る。

貿易相手先別の貿易收支を見るに、キルシエ關稅實施の一九二九年までの状態は、フランス本國との貿易は常に印度支那の入超を示し、之に反して東洋諸國との貿易に於いては常に出超を記録してゐた。つまり印度支那は東洋諸國向けの輸出代金によつて、フランス本國の生産物を購入してゐたと言ふことが出来る。キルシエ關稅設定後は、本國と植民地間の自由貿易の原則によつて、印度支那産物の本國流入が自由に行はれ得るやうになり、更に恐慌後の世界各國に於ける自給自足主義の採用はこの傾向を一層促進し、ために印度支那輸出に於いて本國の占める地位も次第に向上し、遂に本國も亦印度支那貿易に於いて入超すなはち印度支那の側から言へば出超を示すに至つた。一九三九年、一九四〇年に於いては、第六表の示すごとくこの形勢は又もや逆轉し、再び印度支那の入超を記録してゐるが、これは印度支那の輸入増加に依るよりも、戦争勃發による印度支那からの輸出の減退に基くものである。東洋諸國との貿易に於いては、印度支那は常に輸出超過となつてゐる。支那(香港を含む)、

日本、シンガポールはその爲常に片貿易の状態に置かれてゐる。日本の輸入超過は一九三九年に一億フラン、一九四〇年には五億フランに上つてゐるが、これは日本と印度支那との今後の貿易調整に於いて解決さるべき重要な問題である。

四 印度支那貿易の商品別

印度支那貿易の植民地的性格はその商品別構成に於いても明瞭に現はれる。第一次大戦よりの状態を見よう。

輸入	一九一三年	一九二八年	一九三三年	一九三八年
食糧品	四八(三〇.四)%	六三(三三.〇)	一五(一四.九)	三九(三三.三)
工業原料品	四(七.四)	五七(三三.六)	三三(三三.〇)	四九(三九.六)
製造品	一四(六.三)	一三(六.五)	五九(六.四)	一〇八(六.一)
輸出	一九一三年	一九二八年	一九三三年	一九三八年
食糧品	三三(八.〇)	二七(〇.八七五)	七九(七.七)	一七五(六.〇)
工業原料品	五(三.七)	三〇(九.一)	三三(三.八)	一〇三(三.〇)
製造品	一八(六.〇)	九(三.四)	三三(三.五)	八五(三.〇)

輸入に於いて製造品が過半を占め、輸出に於いて食糧品が壓倒的に優勢であるといふこの貿易内容は、印度支那經濟が農業生産を中心とする植民地經濟の段階に止まつてゐることを示してゐる。製造品の輸入のうち、フランス及び植民地からの輸入は、一九三八年に於いて七三.八%を占めて、絶對的な優勢を示し、食糧品の輸出に於いては五七%を占めて孰れに於いても著しい本國偏倚を示してゐる。

先づ輸入商品に就いて見よう。印度支那の輸入が殆んど本國生産物によつて占められ、完成品を中心としてゐ

ることは既に述べた。輸入商品は織物類を第一とし、金属加工品、金属類、大理石・土・石類、各種絲類、植民地産食料品、加工用植物纖維、紙及同製品、化學製品、澱粉質食料品等が之に次ぎ、以上の十種商品のみで全輸入の七二パーセント（一九三九年）を占め、而かもその中の約三分の一は織物類によつて占められてゐる。織物類のうち最大の綿織物であつて、織物輸入の過半を占め、ジュート織物、人絹織物、毛織物、絹織物が之に次いでゐる。織物輸入の七〇パーセントがフランス本國から輸入せられ、綿織物に在つてはその約九〇パーセント、人絹織物に在つては九割以上がフランスから輸入されてゐる。印度支那の輸入は、このやうに綿業を中心とするフランス織物工業の生産物の輸入を第一とし、その他の製造品も亦無税輸入の恩恵の下に印度支那へ流入し、本國工業はかくして印度支那を好個の植民地市場として保持し續けてきたのである。恐慌前の好況期たる一九二八年と恐慌後の回復期たる一九三八年とに於ける主要輸入品を示せば、次の如くである。

第八表 印度支那の主要輸入品（單位：百萬法郎）

	一九二八年	一九三八年
綿織物	二二〇（八・五）%	二四五（二・六）%
石油及原油	二〇五（七・九）	七七（三・九）
金屬製品	九八（三・八）	八九（四・五）
機械器具	一四八（五・七）	一二四（六・三）
絹織物	一二四（四・八）	一〇〇（五・一）

主としてフランス本國産の完成品をもつてする印度支那の輸入貿易は、なんらの關稅をも受けなかつたために、印度支那の工業的萌芽を奪ひ取るといふ役割を果たした。かうした状況の下に於いて、印度支那が繼續的な輸入を行ひ得るためには、勢ひそれは原始的な生産物の輸出によつて得られる輸出代金に依存せざるを得ない。この意味に於いて、印度支那經濟は原始的産物の輸出に全く依據してゐたと言ふことが出来るし、印度支那貿易の植民地性の一つの現はれをそこに見出すことが出来る。印度支那の輸出は、かくして食

2) Annuaire Statistique de L'Indochine, 1923-1929. Tableau du Commerce Extérieur de L'Indochine, 1938.

糧品を第一とし工業原料品が之に次ぎ、輸出先は食糧品はフランスと東洋諸國、原料品はフランスが主であることは既に述べた。輸出の最大は言ふまでもなく米であつて、世界恐慌までは全輸出の六五パーセント、最近では四〇パーセント(一九三九年)を占め、そのうち三〇パーセントが本國に向けられ、他は印度・香港・支那・フィリッピン等の東洋諸國に向けられてゐる。米に次いで重要な輸出品はゴムであり、從來全輸出の五パーセント内外に過ぎなかつたのが、一九三四年以來その重要性を増加し一九三八年には二二パーセントに達してゐる。玉蜀黍の増加も著しく、恐慌後漸増して一八パーセント(一九三八年)に達し、以上の三商品のみで全輸出の七五パーセントを占めてゐる。ゴムはその三四パーセントがフランス本國へ四〇パーセントがアメリカへ送られ、玉蜀黍はその六〇パーセント(一九三九年)が本國に向けられてゐる。その他の輸出品としては石炭・魚類・錫・セメント等があるが、孰れも食糧品と原料品に限られてゐる。

第九表 印度支那の主要輸出品(單位=百萬法)

	一九二八年	一九三八年
米及副産物	一、九九八(六八・〇) %	一、〇一九(三五・八) %
ゴム	一〇二(三・五)	六二〇(二一・八)
玉蜀黍	九一(三・一)	五二一(一七・九)
石炭	九九(三・四)	一二三(四・二)
魚類	一三五(四・六)	七〇(二・四)

大體一九三〇年までの印度支那の輸出は、専ら米に依存してゐた。印度支那經濟が農産物の輸出、それも一種類の農産物の輸出に依存して來たと言ふことは、その植民地的性格を極めて明瞭に示すものではないが、近年に於けるゴム及び石炭輸出の増大もその輸出代金が殆んど印度支那へ還流しないとすなれば、印度支那經濟は依然として植民地性を脱し得ないと言はなければならぬ。それは兎に角としても印度支那の輸出が米を中心として行はれ、且つ印度支那經濟が専らそれに依存して來たといふことは、フランス

の印度支那領有以前から今日に至るまで一貫して變らなかつた事實である。印度支那の米生産が安南人の傳統的農業として行はれ、フランス人輸出業者が華僑を通じてその輸出に従事してゐることを考へ合はせるならば、印度支那の米輸出を單に印度支那經濟の自然的な發展の結果であると結論することは不可能である。それはフランスの經濟政策が印度支那經濟を植民地化したことの一つの現はれであると言ひ得られるであらう。

印度支那貿易の商品別構成については、これ以上詳論する餘白をもたないが、印度支那貿易の最近までの狀況に於いて、その外見上の發展にも拘はらず、それが植民地貿易としての性格を典型的に示してゐることを大體知ることが出來た。⁴⁾ 第一次世界大戰から一九三〇年までの時期に於いて、印度支那經濟は嘗つて見ない繁榮を経験したと言はれ、その貿易數量も貿易價格も顯著な上昇を示してゐることは事實であるけれども、このことは印度支那貿易が植民地貿易としての性格を擴大強化したことを意味するものに過ぎなかつた。一九三〇年後の貿易はかうした植民地性の上に於いて存續せしめられたものであつたが、恐慌後の困難な世界情勢は印度支那の米の輸出市場を狹隘ならしめるとともに、更にその本國流入はフランスの小麥生産者の地位を危くすることとなり、かうした諸情勢に促かされて印度支那經濟の實質的な發展、すなはち工業化政策の問題が始めて採り上げられるまでに至つたのである。このことは逆に言へば、印度支那經濟が今日まで如何に植民地的であつたかを示すものであり、印度支那貿易が如何に典型的な植民地性を附與されてゐたかを證據立てるものに他ならないであらう。

4) これに就いては日本貿易振興協會「佛領印度支那と貿易事情」太平洋協會編「佛領印度支那」第四篇、ロブカン「佛領印度支那經濟發達史」第三篇等参照。